

# 伴造遺跡発掘調査報告書

1987

財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター

# **伴造遺跡発掘調査報告書**

**1987**

**財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター**

## 例　　言

1. 本書は、昭和 61 (1986) 年度に広島県山県郡豊平町から委託を受け、財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した団体営農道整備事業戸谷中央線に係る伴造遺跡（広島県山県郡豊平町大字戸谷字伴造所在）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、調査研究員の佐伯博司・藤田広幸がおこなった。また、遺構・遺物の実測、製図、写真撮影及び本書の執筆、編集は佐伯がおこなった。
3. 挿図と図版の遺物番号は、同一である。
4. 本文中に用いた方位は、すべて磁北である。
5. 本書に掲載した第 1 図は、建設省国土地理院発行の 1 : 25,000 の地形図（琴谷）を使用した。
6. 本遺跡は、伴造古墓として発掘調査を実施したが、埋葬施設を伴っていなかった。したがって、供養のためにつくられたと考えられ、当初の名称が内容と一致しないことから、名称を伴造遺跡とした。



豊平町位置図

## 目 次

I はじめに .....	1
II 位置と環境 .....	2
III 調査の概要 .....	6
IV まとめ .....	11

## 図 版 目 次

図版 1-a 遠景 (北西から)	図版 3-a 調査状況 (南西から)
b 調査前近景 (同上)	b 完掘状況 (南から)
図版 2-a 積石基壇全景 (南西から)	図版 4-a 石造遺物
b 同上 近景 (南から)	b 作業風景

## 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000) .....	3
第2図 周辺地形図 (1:5,000) .....	4
第3図 周辺地形測量図 (1:200) .....	6
第4図 基壇実測図・セクション図 (1:60) .....	8
第5図 石造遺物実測図 (1:6) .....	10

## I は じ め に

山県郡豊平町では、昭和 56 (1981) 年に、生活環境の向上、農業経営の確立、農業生産の向上などを目的として、琴谷・戸谷間に団体営農道整備事業戸谷中央線（全長 2,620 m, 幅 4.5 m）の建設を計画し、国へ認可の申請をおこなった。昭和 57 (1982) 年 国の認可がおり、同年から昭和 62 (1987) 年度の完成を目指して、工事に着手した。

その後、昭和 60 (1985) 年 7 月、豊平町教育委員会は、建設予定地内に周知の遺跡である伴造遺跡が存在することから、豊平町建設課及び広島県教育委員会と協議した。しかし、豊平町では、昭和 57 年度から工事に着手しており、設計変更による現状保存が困難なことから、事前に発掘調査をおこなうことにした。豊平町は、現状では発掘調査をおこなう態勢が整わないため、昭和 61 (1986) 年 1 月、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）に、発掘調査の依頼をおこなった。同年 3 月、センターは豊平町に対し、発掘調査を受託する旨の回答をおこない、同年 5 月委託契約を締結した。発掘調査は、昭和 61 年 6 月 2 日から同月 27 日までの約 1 か月間実施した。また、6 月 26 日センターは、豊平町中央公民館において、豊平町教育委員会と共に、発掘調査報告会を開催した。本遺跡積石基壇上の石造物については、道路建設予定地外へ、移転・保存がなされた。

本書は、以上の経過をふまえておこなった発掘調査の成果をまとめたものである。本書が、地域の歴史研究に少しでも寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、広島県教育委員会の御指導を得るとともに、豊平町建設課、同町教育委員会及び地元の方々から多大の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。

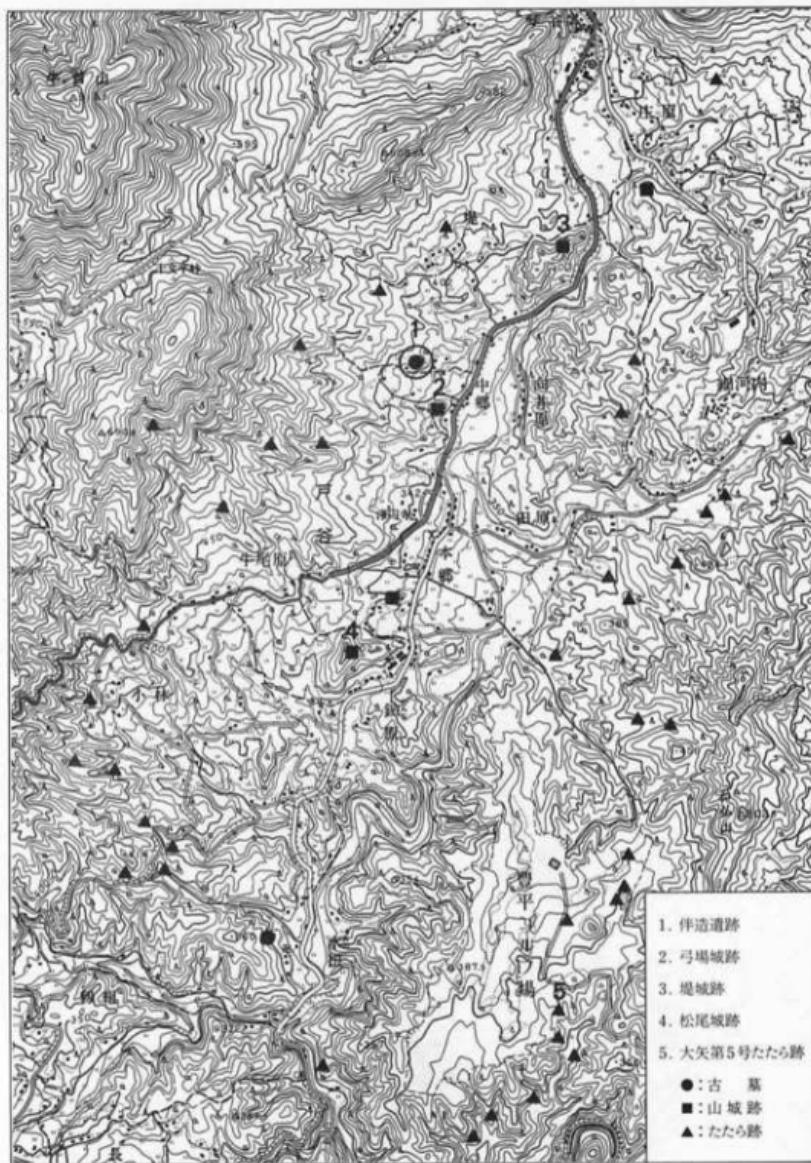
## II 位置と環境

伴造遺跡は、広島県山県郡豊平町戸谷字伴造1216番地に所在する。

豊平町は、県北西部にある山県郡のほぼ中央に位置し、東は千代田町、北は大朝町、北西は芸北町、西は戸河内町、南西は加計町、南は広島市に接し、町面積の80%は山林で占められている。周囲の標高700~900mの山々が隣接市町との境をなしており、町内中央部にも、牛ヶ首山（手毛首山、標高918.9m）、竜頭山（標高928.4m）などがそびえている。町の北部を東流する志路原川は、千代田町で合流して通称可愛川となり、三次市で江の川として西流し日本海へそそいでいる。それ以外の諸河川は、ほぼ南流して太田川の支流西宗川・丁川となって、瀬戸内海へそそいでいる。平地は、この河川流域と支谷に帯状あるいは小盆地状に分布している。

現在、町内で確認されている遺跡は約270か所であるが、その大部分は町内全域に分布するたたら跡である。町内では、今のところ旧石器時代の遺跡は確認されていないが、楓ヶ原第1号遺跡で旧石器時代にさかのぼる可能性のある安山岩の石核が採集されている。縄文時代の遺跡としては、亜仙原遺跡があり、縄文土器片が採集されている。弥生時代の遺跡は、散布地・墳墓など10か所が確認されている。古墳時代の遺跡は25か所が確認され、そのうち20か所は古墳である。調査された古墳はないが、方墳である市蒔第1号古墳をのぞいて、いずれも径10m前後の円墳である。内部主体は、箱形石棺・横穴式石室を中心としており、横穴式石室は古墳時代後期につくられたと考えられる。

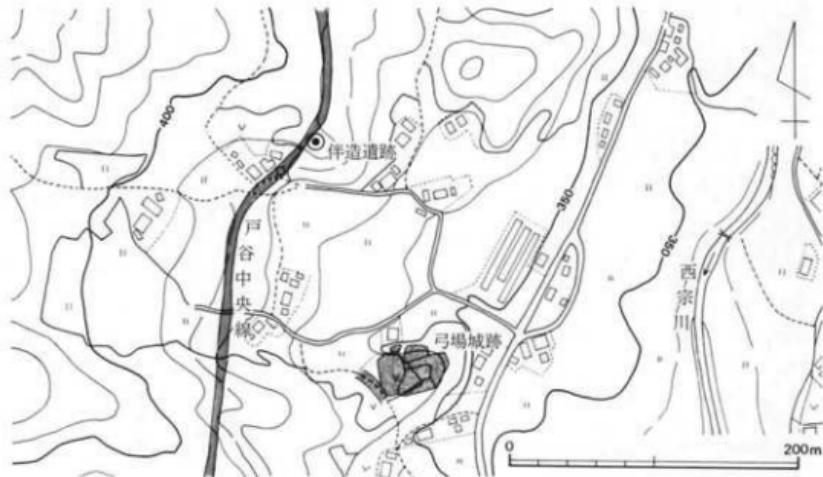
古代の豊平町は、「和名類聚抄」によると「夜万加多」と訓ずる山県郡に属している。山県郡には、賀茂・壬生・山縣・品治・宇岐の五郷があるが、現在の豊平町がどの郷に属していたのかは不明である。しかし、12世紀には町内に志道原庄や三角野村が巣島社領として形成されていたことが知られている。また、前述したように町内約270遺跡のうち大半を占めるのは、たたら跡とよばれる砂鉄を原料とする製鉄遺跡である。発掘調査が行なわれたものは少ないため、時期を明確にできるものはほとんどない。しかし、大矢第5号たたら跡、矢栗たたら跡ではともに、時期をきめる考古学的遺物は出土しなかつたが、鉄精錬炉の地下構造が確認され、焼土・木炭による理化学的年代測定によると、13世紀前後と比定されている。そして、「安芸国徵古雜抄」（巣島文書）中の安芸国山県郡三角野村（現在の豊平町中原）の寛元四（1246）年二月日付の三角野村検注名寄注進状によると、鉄を年貢として納めていたことが知られる。これらのこととは、13世紀ころには豊平町ではたた



第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

たら製鉄がすでに重要な産業であったことを示している。

中世になっても戦島神主家の勢力は、山県郡各地の庄園領主として維持されていた。しかし、各庄園の下司、公文、散侍などの在地役職を独占していた凡氏一族や、承久3(1221)年の承久の乱後、新たに東国から移住してきた吉川氏などの新補地頭や安芸国守護武田氏などに、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて戦島社領が侵略され、郡東部から戦島神主家の勢力は衰退していった。この新しい勢力の中で、この地域において最も大きな勢力となったのは吉川氏である。吉川氏は、承久の乱の戦功で山県郡大朝本庄の地頭職に補任され、経高の時、駿河国(静岡県)から下向し、駿河丸城(大朝町)を本拠とした。その後、経見の代に小倉山城(大朝町)に移り、元春の代に日山城(大朝・千代田・豊平町)を築いて本拠を移し、国人領主に成長していったが、この間、中原村の山縣家秀が出雲の尼子氏と通じて毛利氏に滅ぼされた例にもみられるように、毛利氏や尼子氏、さらに武田氏や防長の大内氏の勢力も豊平町内にはいりこみ、対立抗争を繰り返していくと思われる。しかし、天文16(1547)年、毛利元就の次男元春が吉川氏を継ぎ当主となつてからは、毛利宗家を軸とし、吉川・小早川両家の連合をもとに急速に戦国大名領が形成されていき、豊平町もそれに組み込まれていった。さらに、毛利氏が陶晴賢に反旗をひるがえした時、山県郡大田地方(加計町、豊平町西南部)の土豪・農民が毛利氏に対し蜂起した天文23(1554)年の大田一揆が鎮圧されてからは、山県郡は完全に毛利氏・吉川氏の



第2図 周辺地形図 (1:5,000)

支配下にはいった。慶長5(1600)年の関ヶ原の戦い後、毛利氏が周防・長門へ移されてからは福島正則、ついで浅野氏の支配をうけることになる。

こうした時代を背景に、鎌倉時代から戦国時代にかけて、独立小丘陵上や丘陵先端部に築かれた山城が町内14か所で確認されており、吉川氏による統一前の複雑な勢力争いの一端を示している。本遺跡の南約200mに、戸谷志摩の居城といわれる弓場城跡がある。他の山城の中にも城主名の伝えられているものが7か所あり、うち3か所は吉川氏の家臣のものである。しかし、本遺跡の南約1kmにある松尾城跡の城主である香川雅楽景之は、武田氏の家臣であり、武田氏の勢力もかなりはいりこんでいたと思われる。また、町内には、吉川氏関係の遺跡として、元春が日山城入城の頃築き、元長に家督をゆずって隠居所とした吉川元春館跡・元春と元長の墓所・菩提寺の海応寺跡(史跡)、元春の三男広家の婚姻の際に建てたといわれる松本屋敷跡(町史跡)、吉川元春館跡に伴う城下町の遺構などがある。

このほか中世の遺跡としては、三耳壺の中から古錢の出土した中山遺跡、積石塚や積石基壇上に五輪塔や宝蓋印塔のある古墓や經塚などが20余か所で確認されており、本遺跡もそのひとつである。今まで、古墓で調査されている例はないが、塚上・基壇上にある五輪塔・宝蓋印塔をみると室町時代のものが多いようである。ところで、鎌倉時代末期に芸備地方に進出した浄土真宗は、教団をつくり、「法然上人絵伝」「親鸞聖人絵伝」をかけて民衆に働きかけた。南北朝時代以降、教団はますます拡大し、さらに毛利元就が自らの勢力を拡大するため保護したことによって、安芸国全体に広まっていった。豊平町も例外ではなく、16世紀になると、阿坂の安養寺、戸谷の淨円寺などのように、寺院や道場のなかには、真言宗や禪宗などから浄土真宗に改宗していくものがみうけられる。

#### 参考文献

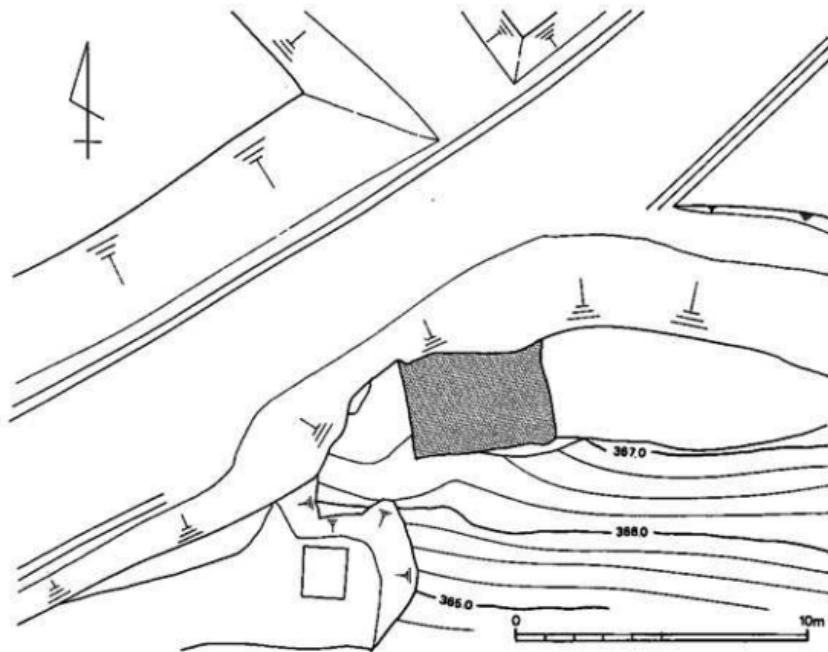
- 後藤陽一 「広島県の歴史」 昭和47(1972)年  
広島県 「広島県史 古代中世資料編 V」 昭和55(1980)年  
新人物往来社 「日本城郭大系13 広島・岡山」 昭和55(1980)年  
平凡社 「広島県の地名」 昭和57(1982)年  
潮見 浩 「中国地方製鉄遺跡の体系的研究」「昭和57年度科学研究費補助金(一般研究A)研究成果報告書」 昭和58(1983)年  
広島県豊平町教育委員会 「豊平町文化財地図」 昭和61(1986)年

### III 調査の概要

#### 1. 調査の経過

伴造遺跡は、太田川の支流西宗川の西岸、通称大槻山東山麓、標高約367mに位置し、周辺の地形は、北から南へ傾斜している。本遺跡の周辺は、以前畑であったが現在は雑木林となっている。この雑木林の北端に、 $5 \times 4$ mの範囲で三段の積石基壇があり、最上段の基壇のやや西寄りに宝篋印塔の基礎が据えられ、その上に五輪石の一部（空・風輪、火輪）が置かれていた。ただ、北側は以前水田となっており、開墾の際に壊されたらしくどの段も残っていなかった。また、他の部分も、土取りや畑の開墾などによって、かなりの破損を受けていた。

調査は、まず基壇上および周辺の草刈りと清掃作業からおこない、基壇の外形を検出する



第3図 周辺地形測量図（アミ目が調査区）(1:200)

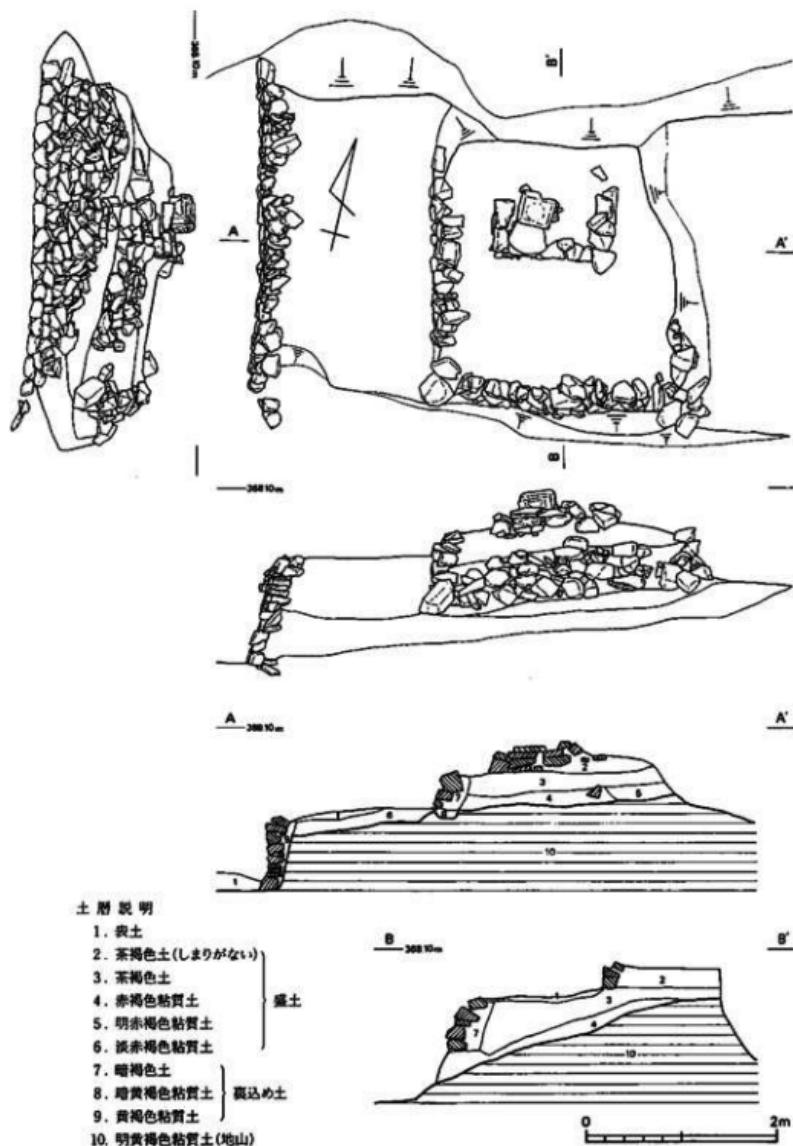
ことから始めた。北側が破壊を受けていたため、平面形および正確な規模を明らかにすることはできないが、残存部分から考えて、方形もしくは、それに近い長方形をなしていたものと思われる。積石の実測と写真撮影の後に、十字に土層観察用の畦を残し、石を取り除きながら掘り下げ、下部構造の検出をおこなったが、土壤等の遺構は検出できなかつた。また、宝篋印塔の基礎も当初の位置から動いていると考えられた。その結果、本遺跡は、墓としてつくられたのではなく、供養のためにつくられた可能性が高くなつた。

## 2. 遺構

一段目の積石は、西辺のみしか確認できず、それも両端はかなり破損を受けていた。現存長3.9m、高さ1mである。地形が北から南へ傾斜しているため、基底部は北端が南端に比べ約25cm高い。基底部には、15~20cm大のほぼ同じ大きさの角礫を一段据え、それから上は10~20cm大の角礫を、最も残りのよい北側で7~8段、隙なくほぼ垂直に積み上げている。しかし、南側はかなり崩れており、2~3段しか残っていない。

二段目の積石は、北辺は残っておらず、三辺が残存している。そのうち、東西の両辺は破損を受けており、南東および南西の両隅もかなり崩れている。なお、両隅には他に比べ大きい石を使用しており、現在はいずれも前方にずれているが、本来は、石積みが崩れるのを防ぐため、意識的に置かれたものと考えられる。また、一段目の積石と異なり、どの辺も基底部の角礫は不揃いである。西辺は現存長2.7m、高さ0.5mである。一段目の積石と同様に、地形が北から南へ傾斜しているため、基底部で北端が南端に比べ約50cm高い。15~30cm大の角礫をほぼ垂直に積み上げており、北側に比較的大きい角礫を使用している。南辺は長さ3m、高さ0.64mである。地形が東から西にむかって若干傾斜しているため、基底部は東端が西端より約20cm高い。中央部が最も残りがよく、両隅に近づくにしたがって残りが悪くなっている。20~30cm大の角礫を横長に積み上げ、その隙間に小角礫をつめている。また、他辺と異なり、直線的でなく、やや中央部にふくらみをもっている。東辺は現存長1.2m、高さ0.4mと三辺の中で最も残りが悪く、20~40cm大の角礫がわずかに残っている程度である。

三段目の積石は、他の積石とは異なり、一辺20~30cm、厚さ5cm前後の偏平な石を2~3段横口積みに使用している。残存状況は二段目の積石と同様で、北辺は残っておらず、他の三辺が残っている。西辺は、現存長0.6m、高さ0.2m、南辺は長さ1.3m、高さ0.3m、東辺は現存長0.9m、高さ0.25mである。ただ、南東隅は多少崩れており、東辺部も若干石が動いているようである。



第4図 基壇実測図・セクション図 (1:60)

また、二段目の西辺がN 14°Wであることからすると、本来各辺がほぼ東西南北を向くように、構築時に配慮がなされていたものと思われる。

次に、基壇の構築状況についてみると、地形が北から南へ傾斜しているため、南側にはかなりの盛土をおこない、さらに裏込め土を施し、周囲に角礫を積み上げて基壇をつくっている。一段目の基壇は東西セクションによると、西側の地山を削って基壇をほぼ形づくっている。その上に、淡赤褐色粘質土を盛って、基壇平坦面をつくり、黄褐色粘質土を裏込めに入れ、角礫を積み上げている。基底部の角礫は、明黄褐色粘質土の地山の上に直接据えている。二段目の基壇も、地形が北から南へ傾斜しているため、赤褐色粘質土、明赤褐色粘質土を地山の上に盛ることによって傾斜の差を少なくしている。さらにその上に茶褐色土を盛って基壇平坦面をつくり、暗褐色土、暗黄褐色粘質土を裏込め土として使い、角礫を積み上げている。なお、南辺部では、一段目の石積みとは異なり、基底部の角礫を盛土の上に据えている。三段目の基壇は、二段目の基壇上のやや西寄りにつくられている。茶褐色土の盛土で基壇の形および平坦面をつくり、その周囲に偏平な石を横口積みにして構築している。この三段目の基壇上、やや南西隅に寄ったところに宝篋印塔の基礎が据えられており、その基礎の前に、25×35cm、厚さ6cmの偏平な石が、まるで供え物を置く場所かのように置かれていた。

なお、宝篋印塔の基礎および基壇の下からは、土壌等の埋葬施設と思われるような遺構は検出できなかった。

### 3. 出土遺物

盛土および裏込め土からの出土遺物はなく、基壇上にあった石造遺物のみである。

#### (1) 五輪石

空・風輪1、火輪1であるが、本遺跡に伴うものでなく、いずれも明治年間に、近くの家の倉の裏にあったものを移してきたものである。

##### a. 空・風輪(第5図 1)

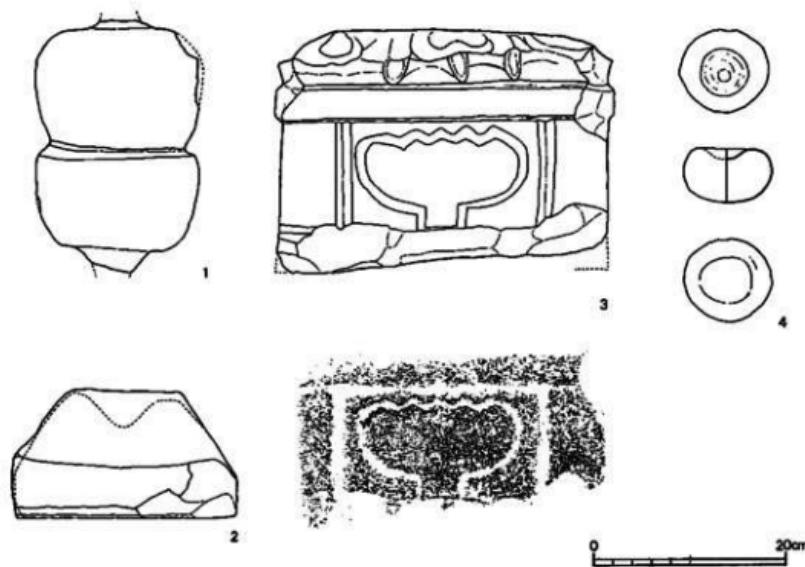
花崗岩製で、空輪部と風輪部の径がほぼ同じである。石材があまり上質でないためか、風化による磨滅をかなり受けしており、また、両先端部が欠損している。空輪部は宝珠形であるが、下部の切れ込みは浅い。先端部分は欠損しており、現存高12.5cm、径17.5cmである。風輪部は深鉢形で高さ10cm、径17cmである。下部の柄は先端部分が欠損しているが、径約8cm、現存高2.5cmである。

b. 火輪（第5図 2）

花崗岩製で、石材はあまり上質でなく、風化などによって、かなりの損傷・磨滅を受けている。高さ 13.3 cm、軒幅 23 cm で屋根の勾配はややきつく、反りは軒端近くで若干みられる程度である。軒の厚さは、中央部で 5.3 cm、軒端で 6.3 cm と、軒反りもあり強くない。上端は 11.5 cm で、径 8.5 cm、深さ 3.7 cm の枘穴が穿ってあるが、下端にはみられない。

(2) 宝篋印塔（第5図 3）

基礎のみである。花崗岩製であるが、石材はあまり上質ではなく、破損および風化による磨滅をかなり受けている。特に、底部において破損が顕著である。高さ 25 cm で、上に複弁一葉を中央部に配し、隅にも複弁の反花を刻出し、その間に風化による磨滅のため明瞭ではないが、間弁らしいものを入れている。その上端の幅は 20 cm である。なお、反花の下に下垂弁状のものが彫り込まれている。側面の高さ 18.5 cm、幅 34.5 cm で、縦 12 cm、横 21 cm の格狭間の中に開蓮華文を配している。破損のため、格狭間および開蓮華文が確認できるのは三面のみであるが、残る一面も周囲の彫り込みが多少残っていることから、四面全てに彫られていたと思われる。開蓮華文は鋸歯状をなしており、側面のふくらみはあまり



第5図 石造遺物実測図（1:6）

ない。脚間は高さ 2 cm、幅 3 cm である。また、格狭間の額部は上下の幅が 3 cm 前後であるのに対し、側面の幅は 6 cm 前後である。そして、上下の額部に対し、側面の額部を削って段差をつけている。彫りは全体に浅く、反花、開蓮華文なども偏平でやや難な感じを与えていている。

### (3) その他の石製品（第 5 図 4）

花崗岩製で風化がはなはだしい。径 9 cm、高さ 5.5 cm、くぼみ径 5 cm、深さ 1 cm、重量 600 g である。本遺跡においては、空・風輪の上に重ねて置かれていたが、性格および用途などは不明である。

## IV ま　と　め

今回発掘調査を実施した伴造遺跡については、前述のように後世の攪乱をかなりうけており、本来の姿を留めるものではないが、以下、調査で明らかとなった事柄を整理し、まとめにしたい。

積石基壇については、北辺が破壊をうけているため、平面形および正確な規模は明らかにしがたいが、方形もしくはそれに近い長方形をなしていたと考えられる。一段目の積石は西辺しか残っていないかったが、使用している角礫もやや小さく、基底部にはほぼ同じ大きさの角礫を据えたり、上の角礫も間隙なく積み上げるなど、二段目の積石とは様相が異なっている。さらに、東側は戦後の土取りによって多少削平はうけているが、西側と対応するような地山の掘削も認められず、また、高さを考えても積石があったとは考えにくい。盛土の方法も、二段目や三段目の基壇と異なっている。以上のことから、一段目の基壇および積石は、二段目や三段目の基壇と同時期に構築されたのではなく、後世に畠の開墾などに関連してつくられたと考えられる。

三段目の基壇上に据えてあった宝篋印塔の基礎は、底部付近に破損部分が多く、石材は上質ではないが、これらの破損が風化によるものだけとは考えにくい。むしろ、原位置から動く間に破損が生じたと考えた方が妥当と思われる。また、他の塔身・笠・相輪を失っていることも、そのことを裏付けているようである。しかし、本遺跡の周辺には、現在のところ、他に宝篋印塔は知られていない。このことは、少なくとも宝篋印塔の基礎が、この積石基壇の近くに存在していたことを示すのではないだろうか。さらに、基礎の上に置

かれていた五輪石は、前述したように、他の場所から移転したものである。

さらに、本遺跡は、当初古墓として調査をはじめたのであるが、基壇の盛土および基壇の下からも埋葬施設と考えられるような遺構ははら検出されず、骨蔵器などの遺物も出土しなかった。したがって、本遺跡の積石基壇の性格としては、墓としてつくられたのではなく、供養のためにつくられたものと考えるのが妥当であろう。

次に、この積石基壇の築造時期について考えてみたい。

まず、石造物は原位置を保っていないが、積石基壇の築造時期を想定する材料となるであろう宝鏡印塔の基礎、五輪石の空・風輪、火輪の時期から検討してみたい。石造の宝鏡印塔は、鎌倉時代中期ごろからつくられはじめるが、この時期のものは一般的に規模が大きく、文様などの図案や彫りもていねいで安定感のあるものが多い。それが室町時代になると、小型化・簡略化する傾向をみせていく。この背景には、需要増加に対する量産化という事情が考えられる。文様も形式化し、彫りも浅くなり、石材の質も量産化に伴って悪化し、この時期につくられたものが、鎌倉時代につくられたものより風化が著しいという現象もみられる。この積石基壇上の宝鏡印塔の基礎は、あまり上質の石材は使用しておらず、風化も著しい。また、開蓮華文側面のふくらみの状態、格狭間額部が上下の幅に比べ側面の幅の方が大きいことや、反花座・開蓮華文などの文様の彫りが全体に浅く、石の面がふくらみをもたず偏平で、図案も形式化しているなど、室町時代後半期の特徴をもっている。また、前述したように、格狭間の額部が全部同じ高さではなく、上下の額部に比べ側面の額部を低くし、段差をつけている。これと同じつくりのものが、佐伯郡吉和村の妙音寺原遺跡<sup>11</sup>から出土している。五輪石の空・風輪、火輪についても、石材・大きさなどから同じ時期と思われる。

この遺跡周辺には、現在のところ、他にこのような積石基壇がないため、今後とも類似の遺跡や中世遺物などについて検討をはからなければならぬ。こうした積石基壇が築造される背景について考えてみると、毛利氏の保護のもとに勢力を強めていった浄土真宗においては、当方ではこうした基壇などを築いていないようであり、本遺跡についての伝承も全く伝えられていない。供養のためにこうした基壇を築いたのは特定の有力者と考えられ、一般にこうした基壇を供養のために築かない浄土真宗が広く普及する以前の様相とみられる。豊平町内においても、室町時代末期ごろから、阿坂の安養寺、戸谷の淨円寺のように寺院や道場のなかには禪宗や真言宗などから浄土真宗に改宗するものがみうけられる。本遺跡はこうした室町時代末期ごろの事情からすると、下限は少なくとも、それ以前と考えられ、有力者の移転や改宗など何らかの事情により、築造の主旨も失われたと考え

られる。なお、本遺跡の南約200mの丘陵先端上、本遺跡からみわたせる位置に、『芸藩通志』で戸谷志摩の居城といわれる弓場城跡がある。弓場城跡は、郭9、掘切1の小規模な城跡で、武田氏の家臣である香川氏の居城松尾山城跡、堤九助の居城堤城跡の中間地点に位置している。今のところ、本遺跡の積石基壇・宝篋印塔・五輪石と弓場城跡・戸谷氏を直接結びつける資料はないが、こうした積石基壇や宝篋印塔、五輪石を築くことが、現状では一般的ではなかったことを考慮すると、何らかのかかわりをもっていたのではないかと推測される。また、本遺跡周辺では、たたら跡は別にして、山城など中世の遺跡が多く、町内全域をみわたしても積石基壇を伴う古墓は、上部構造の五輪石、宝篋印塔などから、ほとんど室町時代の築造と考えられている。

広島県内における本遺跡と同様な方形積石基壇の調査例としては、妙音寺原遺跡、高田郡八千代町の桑の木古墓<sup>②</sup>などがあげられる。前者は29基の古墓が確認された遺跡であるが、このうち第9号墓は東西長3.3~3.4m、南北長3.1~3.3m、高さ40cmの方形積石基壇で、基壇内の径1.5m、深さ25cmの凹みから室町時代中期の備前焼壺が出土している。29基のうち14基が方形ないし長方形の積石基壇を伴う古墓で、室町時代から江戸時代初期の築造が考えられている。後者は一辺2.1mの方形積石基壇で、暗褐色土の上を小礫で覆って板石を置き、その上に五輪塔と宝篋印塔を据えていた。この周辺には、毛利氏の配下である中村氏の居城田屋城があり、この古墓は中村氏に關係する墓と考えられている。築造時期は、石造物と中村氏に関する歴史的背景から、室町時代末期ころと推定されている。これら以外に、室町時代前期とみられる山県郡千代田町の古保利第44号古墳の上に存在した中世墳墓<sup>③</sup>、室町時代末期とみられる賀茂郡大和町の王子原積石塚<sup>④</sup>などがあり、方形積石基壇の形態が、室町時代に県内でかなり普及していたと考えられる。

本遺跡の積石基壇の築造時期を直接示すものはないが、以上述べてきたように、宝篋印塔の基礎・五輪石の築造時期、弓場城跡の存在、当地域の宗教的背景、周辺および町内に中世の遺跡が多いなどの歴史的環境、県内で今までに調査された方形積石基壇を伴う古墓の時期などから考えて、室町時代後半につくられたと考えるのが妥当ではあるまいか。

また、次に例をいくつかあげるように、従来、古墓とよばれていた積石基壇、積石塚などのなかに、発掘調査の結果、埋葬施設が確認できないものがある。東広島市西条町の才の木古墓群内のS T03<sup>⑤</sup>、山県郡千代田町の塚追遺跡の積石塚<sup>⑥</sup>、佐伯郡吉和村の込山遺跡<sup>⑦</sup>などで、本遺跡もその一つである。これらは、同一の性格とするには、今後の検討も必要であるが、埋葬施設がないことから、墓としてつくられたのではなく、供養のためにつくられたと考えるのが妥当であろう。

註

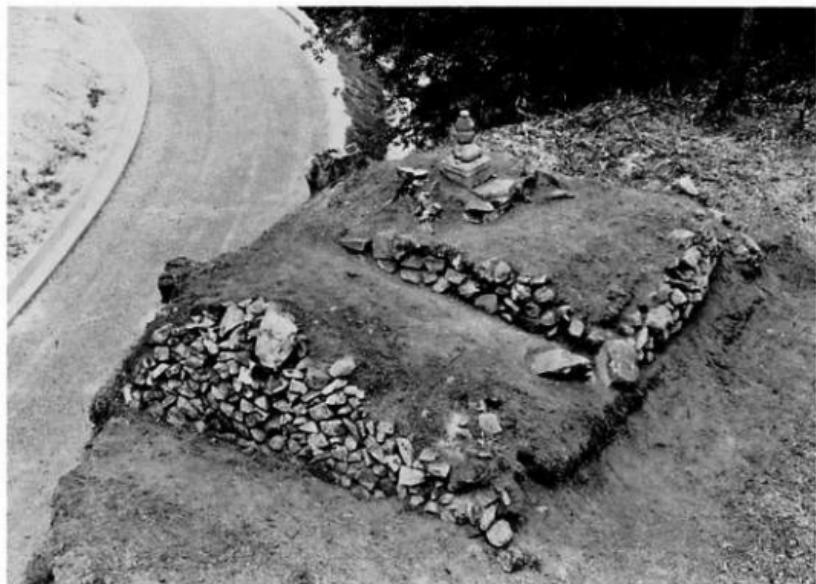
- (1) 広島県教育委員会 「妙音寺原遺跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(4)  
昭和 58 (1983) 年
- (2) 土師埋蔵文化財発掘調査団 「土師」 昭和 45 (1970) 年
- (3) 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団 「龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書」 昭和  
51 (1976) 年
- (4) 桧原埋蔵文化財発掘調査団 「椋原ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査概報」 昭和 45 (1970) 年
- (5) 広島県教育委員会・財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 「才ノ木古墓群」「西条第一土地区  
画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」 I 昭和 58 (1983) 年
- (6) 広島県教育委員会 「塚追遺跡群」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(3)  
昭和 57 (1982) 年
- (7) 広島県教育委員会 「込山遺跡」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(4)  
昭和 58 (1983) 年



a. 遠 景 (北西から)



b. 調査前近景 (北西から)



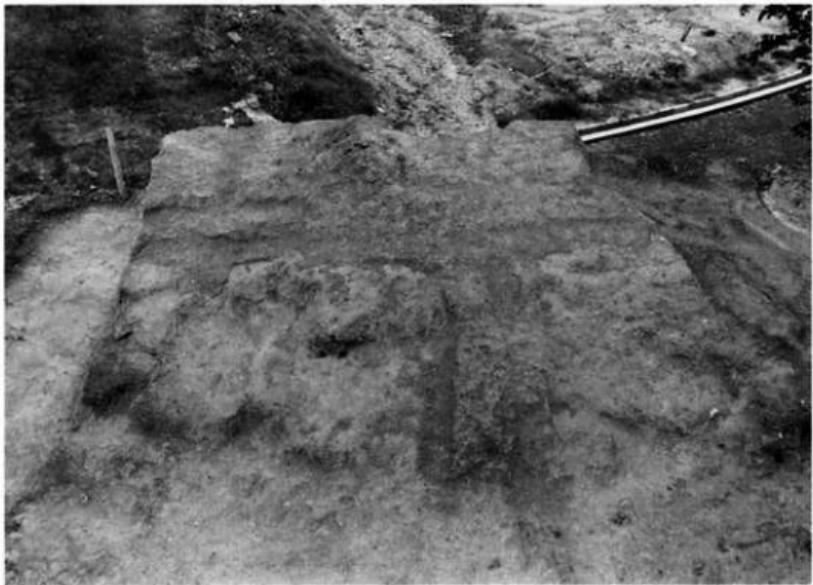
a. 積石基壇全景（南西から）



b. 同上近景（南から）

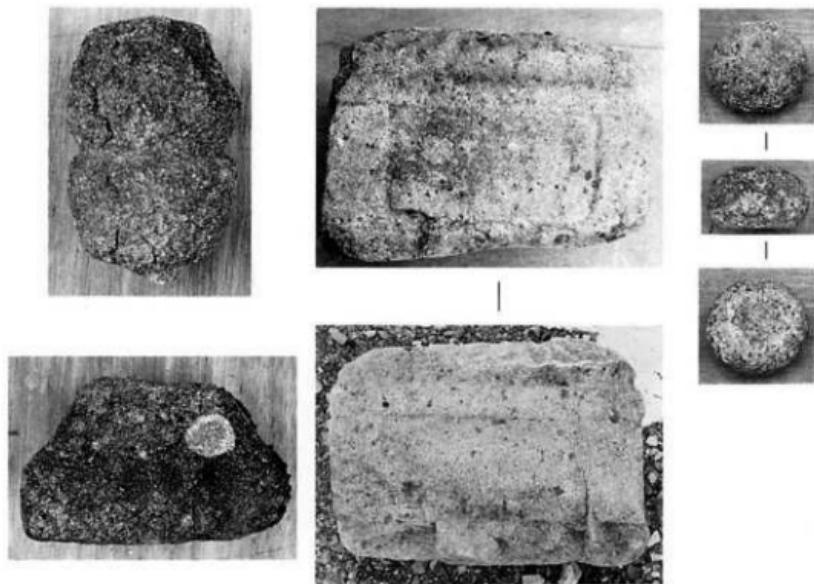


a. 調査状況（南西から）



b. 完掘状況（南から）

図版 4



a. 石造遺物(約1:6)



b. 作業風景

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第65集

伴造遺跡発掘調査報告書

発行日 昭和62(1987)年3月

編集・発行

財団法人 広島県埋蔵文化財調査センター  
733 広島市西区駅音新町4丁目8-49  
TEL (082) 295-5751

印刷所

電子印刷株式会社